伊勢物語におけるソ／コ系指示語の使い分け（続）

田口尚幸

一　序

伊勢物語のソ／コ系指示語の分布には、次のような特徴がある。

○同一章段内においてソ／コ系の併存が少なく、一方が多ければ一方が少ないという反比例の関係にある。

○第一・二次の成立とされる章段はソ系多／コ系少、第三次の成立とされる章段はソ系少／コ系多、という分布が見られる。

研究者のなかには、この分布を以て、成立論の段階分けの正当性や語り手の進化論的〈変化〉を説く者もいる。しかし、そう考える前に、ソ／コ系がどのような文脈において用いられるかを明らかにしておく必要があるはずだ。前稿「伊勢物語地の文における対人物ソ／コ系指示語の使い分け」（「国語国文学報」平成5・3）では、ソ／コ系前後の文脈を調査し、ソ／コ系使い分けの原理として〈非転換／転換〉説を提案したが、それ以上は論及できず、新基準を提案しただけにとどまった。

前稿の補訂版である本稿の第一の目的は、ソ／コ系の分布を語り手の〈変化〉とかかわらせる成立論派に異を唱えることにある（係助詞ナムに関しても若干触れる）。特定の諸章段にかぎって成立事情のちがいを説くだけならまだしも、語り手の進化論的〈変化〉まで説くとなると、行きすぎを認めざるを得ないのだ。

そして、〈変化〉説を批判した後に、前稿で提案した〈非転換／転換〉説を補足・補強する。これが第二の目的だ。具体的には、

i ソ系多用による文連接

ii 会話文・心話文におけるコ系多用、あるいは、現場不在対象に付くコ系

iii 後注冒頭部にくるコ系

などを〈非転換／転換〉説で説明する。前稿で対象外とした対

事物のソ／コ系や会話文・心話文も視野に入れ、論及しなかった事象の究明をとおして、〈非転換／転換〉説の適応範囲を拡大＝補足する。それが〈非転換／転換〉説自体の確認＝補強に繋がることになるだろう。

また、なぜ同一章段内においてソ／コ系の併存が少なく、なぜ一方が多ければ一方が少ないのか、という問題も併せて考える。これが第三の目的だ。

前稿もまた本誌に掲載したが、説明が煩雑でわかりにくかったり、処理の仕方がまずかったりして、早く訂正しなければと密かに考えていた。また、成立論派に対する姿勢を明確にできず、忸怩たる思いもあったし、〈非転換／転換〉説で説明できる対象・事象がまだあるのに、それを書ききれなかった。前稿で打ち出した〈非転換／転換〉説の意義は小さくなかったと信じているが、書き損じや書き残しはかなりあった。今、五年の歳月を経て、前稿の補訂版をここに提出する。

二　成立論派と文脈派に分かれる先行研究

序で述べた問題にとりかかる前段階として、まず、先行研究および田口前稿を紹介しておこう。伊勢物語におけるソ／コ系の分布について論じたものには、辛嶋稔子(1)・片桐洋一(2)・神谷かをる(3)・神尾暢子(4)および田口の論文がある。

このうち、辛嶋・片桐・神谷は、ソ／コ系の分布を三段階成立論とかかわらせて説明しようとしている。

辛嶋は、ソ／コ系が文脈によって使い分けられるとは考えず、「作者の癖、または文体的相違」によって使い分けられると考えた。辛嶋は、

早い段階の成立とされる章段…ソ系多／コ系少
遅い段階の成立とされる章段…ソ系少／コ系多

という特徴的分布に着目し、それにもとづいて成立次元の相違を述べ、片桐が行なった段階分け(5)の妥当性を主張した。

辛嶋説を継承する片桐は、成立次元の相違を述べただけの辛嶋説をさらに成立論的な方向へと進めた。片桐は次のような指摘をした。

第一・二次章段…ソノを用いて「登場人物の事績を『昔』という時間的彼方に押しや」る。
第三次章段……「話し手と聞き手の間で話題が一致し、話題の中心に据えるという了解が出来あが」るため、コノを用いる。

これを踏まえて片桐は、「〈小説の方法〉に近付いて来ている」あるいは「〈物語から小説へ〉という変化」とまとめた。古代的な物語＝ソ系多用文体から近代的な小説＝コ系多用文体へ進化する、という考え方らしい。

片桐説に近い考え方をしているのが、神谷説だ。

第一次章段……「聞き手をそれほど意識せずに書こうと」するため、客観的に指示するソノが多い。

第二・三次章段…「聞き手をめざして語るように書くことができるように文章に慣れて」くるため、積極的に指示するコノが多くなる。

というような内容で、「書くことができるように文章に慣れ」るといった表現から察すると、片桐説同様、進化論的な考え方のようだ。

以上がソ／コ系の分布を伊勢物語三段階成立論とかかわらせる先行研究だが、文脈とのかかわりを無視して「作者の癖、または文体的相違」や語り手の進化論的〈変化〉を言う前に、ソ系が使われるような文脈／コ系が使われるような文脈、ということを考えてみる必要があるのではないか。文脈とかかわらせる立場だ。

神谷は、成立論的に〈変化〉という概念を導入する一方で、文脈のなかでソ／コ系が使い分けられる基準も提示している。同一論文内に次元の異なる二つの結論が併存し、そのすり合わせがなされてないのは気になるところだが、とにかくその部分だけを紹介すると次のようになる。

「ソ系…特立すべき内容が知らされていない
「コ系…特立すべき内容が知らされている

ソ系の方は、登場人物がまだ大した情報を付与されていないことを意味し、コ系の方は、登場人物がある程度の情報を付与されていることを意味するらしい。特立＝クローズアップするにはそれなりの情報を付与されていなければならない、という考え方なのだろう。

神尾は、

「ソ系…指示対象が存在の主体
「コ系…指示対象が行動の主体

という基準を提示した。たとえば「男〜。ソ／コノ男…。」という文であれば、ソ系の方は、「〜」の部分が「ありけり」などと書かれていることを意味し、コ系の方は、「〜」の部分が「往にけり」などと書かれていることを意味するらしい。

また、神尾は、

「ソ系…指示対象を明示する文と指示語を含む文が隣接
「コ系…指示対象を明示する文と指示語を含む文が近接

という基準も提示した。ソ系の場合は「男〜。」と「ソノ男…。」がすぐ隣に接し、コ系の場合は「男〜。」と「コノ男…。」がやや離れることとなるそうだ。

しかし、前稿で述べたが、右の三基準は、どれも全くはずれてはいないものの、例外が多かったり、基準自体があいまいだったりして、完全なものとは認められない。また、神尾説には原理的説明がない。神谷説と神尾説がどう結びつくかもわからない。

田口は、右の注目に値する三つの基準を包括的に統合し、かつ、原理的説明も可能な〈非転換／転換〉という新基準を提示した。〈非転換／転換〉とは、指示語直前部において焦点となる人物が指示語までの間で〈転換しないか／転換するか〉、と

いうことだ。たとえば、ソ系の〈非転換〉の例をあげると、

西の京に女ありけり。ソノ女、世人にはまされりけり。　（2段）
└─ 非転換 ─┘

となり、コ系の〈転換〉の例をあげると、

女はらからすみけり。コノ男かいまみてけり。　（1段）
└──── 転　換 ────┘

となる。ソ系の全用例をあげたのが【表1】、コ系の全用例をあげたのが【表2】だ（前稿の〈表1〉・〈表2〉を簡略化し、例外の数を減らした）。例外を除いてもなお数例の例外があるが、この新基準は極めて高い確率で当てはまる。

この〈非転換／転換〉という新基準が、

谷ソ……特立すべき内容が知らされていない
谷コ……　〃　知らされている
尾Iソ…指示対象が存在の主体
尾Iコ…　〃　行動の主体
尾IIソ…指示対象を明示する文と指示語を含む文が隣接
尾IIコ…　〃　近接

という右の三基準を包括する理由は次のとおり。まず、ソ系。前文で指示対象がただ単に提示されているだけの状態であれば（谷ソ・尾Iソ）、次文ではそれにまつわる説明がす

【表1】　対人物ソ系以前と以後における焦点の〈転換〉

番号	章段	指示語以前／以後
(1)	1	男→男
(2)	2	女→女
(3)		女→人(女)
(4)		女→ソレ(女)
(5)	4	人→ソレ(人)
(6)	9	男→男
(7)		不特定用法
(8)	39	帝→帝
(9)		みこ→みこ
(10)	43	親王→親王
(11)	69	男→男
(12)	77	多賀幾子→ソレ(多賀幾子)
(13)	82	親王ゑ人(馬頭)
(14)		有常→ソレ(有常)
(15)	84	母→母
(16)	88	友達ども→ソレ(友達ども)
(17)	94	男→男
(18)	96	不特定用法&話し言葉
(19)	101	行平→人(行平)
(20)	107	男→男
(21)	110	女→ソレ(女)

※(7)ソノ人(誰ソレ)の御もとにとて～
※(13)右の馬頭なりける人を(親王ハ)常に率ておはしましけり。時世経て久しくなりにければ、ソノ人(馬頭)の名～
※(18)「ソノ人(誰ソレ)のもとへ～」とて～

【表2】　対人物コ系以前と以後における焦点の〈非転換〉

番号	章段	指示語以前／以後	番号	章段	指示語以前／以後
(1)	1	女はらから→男	(23)	61	話し言葉
(2)	10	母→むこがね	(24)	62	話し言葉
(3)	21	女→女	(25)	63	子→女
(4)		男→女	(26)		心話
(5)	23	男→女	(27)		世の中の例→人(男)
(6)		女→男	(28)	65	男→女
(7)		女→男	(29)		男→女
(8)		男→もとの女	(30)		男→男
(9)		男→女	(31)		男→帝
(10)	24	女→男	(32)		話し言葉
(11)	39	至＝コレ	(33)		帝→男
(12)	40	親→女	(34)		帝→女
(13)		親→女	(35)		女→男
(14)	43	また人→女	(36)		男→女
(15)	45	娘→男	(37)	69	話し言葉
(16)		蛍→男	(38)	79	後注冒頭
(17)	47	女→男	(39)	83	親王→馬頭
(18)	58	女ども→男	(40)	87	(舞台解説)→男
(19)		女ども→男	(41)		佐ども→男
(20)		女→男	(42)	88	慣用的表現
(21)		男→女ども	(43)	96	兄→女
(22)	60	家刀自→男	(44)	115	男→女

※(11)(男ガ)うち泣きて(見送リヲ)やみぬべかりける間に、源の至といふ人、コレ(至)ももの見るに～
※(42)昔、いと若きにはあらぬ、コレカレ友だちども集りて～
※(3)(女ハ)出て去なば～とよみおきて、出て去にけり。コノ女かく書ききたるを～
※(30)(男ハ)のぼりぬ。かくかたはにしつつありわたるに、身もいたづらになりぬべければ、つひにほろびぬべしとて、コノ男～

ぐに続かなければならない(尾Ⅱソ)。つまり、前文から次文の間で焦点となる人物が変わってしまえば、前文で提示した人物の説明が次文でできなくなるから、そうならないよう、焦点は〈非転換〉のまま聞き手の意識を繋ぐことになる。

次に、コ系。

前文で指示対象の行動が十分に描かれ(谷コ・尾Ⅰコ)、次文で別の人物の情報が割り込み、別の人物に焦点が〈転換〉してしまえば、結果的にコ系を含む次々文までの距離は離れることになる(尾Ⅱコ)。

田口の提示した新基準は、適用範囲の広さ・確かさと、原理的説明を可能にする合理性を併せもつ。ちなみに、田口は、前稿において、

○対人物ソ系指示語には、聞き手の意識をその場にとどめ、積極的な展開を阻むような役割がある、とも言える。

○対人物コ系指示語には、それまでの聞き手の意識を一旦切り、新たな展開へと導くような役割がある、とも言える。

とまとめている。

では、成立論派はどうなるのか。文脈とのかかわりが認められても、そういう文脈＝文体を用いたのは「作者」だ。突き詰めれば「作者」にまでたどり着く。もし成立論派が着目するような分布が認められれば、「作者の癖、または文体的相違」を認めないわけにいかない。実際、前稿では、成立論派が指摘した分布と辛嶋の言う「作者の癖、または文体的相違」は追認している。

ただし、手放しで認められるわけではない。そのサンプル数は少なく、しかも、偏っているから、ソ／コ系が多く分布する章段に対象を限定しなければならない。【表3】は前稿〈表4〉に手を加えたもので、伊勢物語全章段のソ／コ系とナムの分布を表示したものだ（片桐の段階分け＝網掛の種類やナムの分類に関しては表末尾参照）。ソ／コ系がいくつかの章段に集中して偏在していることがわかる。この不十分な分布調査から、段階分けの正当性を全体にわたって主張できるだろうか。行きすぎを認めざるを得ない。この点はまずおさえておきたい。

また、序で述べたとおり、

○片桐・神谷が導入した〈変化〉という進化論的な見方は首肯できるか。

という問題もある。これは前稿で先送りした問題だ。次節ではこの問題を検討する。なお、片桐がもう一つの論拠としてあげた係助詞ナムの用法についても検討を加える。

三　語り手は〈変化〉しているか

以下、成立論派の進化論的見解に対する回答を行なう。

繰り返すが、対象をソ／コ系の多い特定の章段に限定すれば、かなり限定的にはなるが、「作者の癖、または文体的相違」は認められる。また、それらのばらつきを成立次元の相違に結び付ける点もよしとしよう。「作者の癖、または文体的相違」すなわち各章段の出自のちがいを説くところまでは認めている。

問題があるのは、片桐・神谷が導入した〈変化〉という進化論的な見方だ。成立論派にしてみれば、増益・付加されたと推定する章段において、近代的な小説へ繋がる進化の道筋、あるいは、時間の経過にともなう語り手の慣れが認められる方が論旨に合うだろう。しかし、そこまで言うのは論理的飛躍と言わざるを得ない。コ系を多用する文体が進化型だと直ちに断言で

きるのか。

まずは、文学史的および国語学的な視座から、ごく大まかに批判しよう。

大和物語に注目したい。文学史のうえでは伊勢物語が大和物語に先行すると一般的に言われているが、成立年次はともかく、歌物語の形態について考えた場合、後発の大和物語の方が先行する伊勢物語より素朴で初原的な形態と考えられている。国文学者では、古くは益田勝実(6)、最近では高橋亨(7)などがそうした印象を述べているが、大和物語の、歌語りの場から産地直送したようなとれたての生々しさは誰しも認めるところだろう。国語学者では、阪倉篤義(8)が係助詞ナム―過去の助動詞ケルに着目し、その用法が「正に『語り』の形式にふさはしい」こと、その用例が伊勢物語より大和物語に多いことを理由に、益田説の裏付けを行なっている。最近では、南崎晋(9)が大和物語のなかでも伝承説話的性格の強い後半部にナム―ケルやコ系が多用されることを指摘しているが、伊佐山潤子(10)も同じ点に注目し、次のように述べている。

前半部に比べて後半部の方で、文連接法として指示詞型が多用される、「この」の使用が目立つ、「けり」や「なむ―ける」が頻繁にあらわれる、ということが明らかになった。これらはいずれも従来、いわゆる「歌物語」の特徴と言われて来た事柄である。そしてこれらはすべて「歌物語」が本来語られたもの、「歌語り」を基礎としたものであることから来た特徴であった。つまり、もともと耳で聞くものであったために、文連接法では指示詞型を多用して前文とのつながりを強め、話を間違いなく把握させる、指示詞では「この」を使って話の内容が話し手にも聞き手にも身近なものであることを意識させる、さらには「なむ―ける」の係り結びによって念を押しながら、「けり」文末で説き明かしていくという方法がとられたのであった。

コ系の多寡が歌語りの場からの近さを示すバロメーターなら、伊勢物語のコ系多用章段も、大和物語後半部と同様、歌語りの場から近いと言えそうだ。

伊勢物語の場合、【表3】を見るかぎりではコ系の多さとナムの多さは必ずしも一致しないが（例外は65段くらい）、伝承説話的性格という点では、コ系の多い23・58・63・65段のうち、筒井筒の23段や九十九髪の63段などは該当する。不作法な女たちが風流な男の家に上がりこむ58段や恋せじの禊の65段も、登場人物のやりとりが動的で、はしたない行動を気取らずに描いており、説話らしさは看取できる。また、四章段とも古今集読人不知歌（あるいはその類歌）や万葉類歌をとりこんでいて(11)、民間で語り伝えられてきたという伝承性が感じられる。伝承説話的という点でも、伊勢物語のコ系多用章段は、大和物語後半部と同じく、歌語りの場から近いと言えそうだ。

片桐・神谷はコ系多用型文体を進化した形態と考えたようだが、たとえ伊勢物語のコ系多用章段が後補章段だったとしても、

成立年次に関係なく、形態は素朴で初原的だ。コ系多用型文体は言わばライブ版に近く、洗練される以前の生々しさを有している。後補章段のようだから文体も進化型だろうと考えるのは安易にすぎる。

つづいて、具体的に論述している片桐の論法・論拠に対応し、より細かく批判する。

片桐は、第三次の成立と推定する58・65段の登場人物の殆どにコ系が付されていることを述べ、

一体、「これ」や「この」は、話し手と聞き手の間で話題が一致し、話題の中心に据えるという了解が出来あがった事物に用いられる指示語である。

とコ系の性格を規定したうえで、63段の「コノ在五中将」を例にあげ、

既に物語に書かれ、語り手と聞き手の第一の対象となっているから「この」を用いたのである。わかりやすく言えば、「この物語の主人公の在五中将」とでもいうような意味で

【表3】 各章段におけるソ／コ系の分布&系助詞ナムの用法

章段番号	ソノ人物	ソレ人物	ソコ事物	コノ人物	コレ人物	ココ事物	ナム
101	1	(2)	(1)				S・解・マ・S
102							ア
103							解・ア
104						(1)	し
105							
106							
107	1			(1)			S・「」
108							
109							
110		1					「」
111							
112							
113							
114							
115				1			
116							し
117							
118							
119							
120							
121							
122							
123							
124							
125							

ナム
- 無説・接続詞…解・接
- しめくくり等…し
- story…S
- 歌のマエ・アト…マ・ア
- 「～」…「」

解…状態・属性・由来・状況などを解説する際にあらわれるナム（【表９】参照）
接…「さて」・「されば」などの接続詞につづくナム
し…章段末のしめくくりor後注or後日談にあるナム

S…storyを語る際にあらわれるナム
マ…歌のマエにあるナム（「かかる歌をナム～」・「かくナム」・「歌をナム～」→歌）
ア…歌のアトにあるナム（歌→「とナム」・「とてナム」・「といひてナム」）

「」…会話文・心話文におけるナム（手紙形式も含む）

濃い網掛…片桐が第一次章段と推定する章段
薄い網掛…片桐が第二次章段と推定する章段
網掛ナシ…片桐が第三次章段と推定する章段

章段番号	ソノ人物	ソレ人物	ソコ事物	コノ人物	コレ人物	ココ事物	ナム	解説・接続詞…解・接 しめくくり等…し story…S 歌のマエ・アト…マ・ア 「～」…「」
1	1	(1)		1				解・ア・し
2	2	1			(1)			解
3								
4		1						S
5	(1)							
6		(1)			(1)			S
7								ア
8								
9	2	(4)	(2)(1)		(1)	(1)		解・解・「」
10	(1)			1				S・解・接・ア・し
11								
12				(1)				
13								S
14			(1)					S・S
15								
16					(1)			
17								
18								
19								し
20								S
21				2				マ
22	(1)							し
23				5				S・マ
24			(2)	1	(1)			マ
25								
26								
27								
28								
29								
30								
31								
32								
33					(1)			
34								
35								
36								
37								
38								
39	2	(1)			(2)	1		
40				2				S・し
41						(1)		
42								マ
43	1			1				解
44					(1)			
45				2				
46								「」
47				1				
48								
49								
50								

章段番号	ソノ人物	ソレ人物	ソコ事物	コノ人物	コレ人物	ココ事物	ナム	解説・接続詞…解・接 しめくくり等…し story…S 歌のマエ・アト…マ・ア 「～」…「」
51								
52								S
53								
54								
55								
56								
57								
58			(1)	4	(1)			ア
59								ア
60				1				S
61					1			
62				1				
63	(1)			3				S・し
64								
65			(1)	9	(1)			S・ア・S・S
66						(1)		
67			(1)					
68								
69	1	(1)	(1)	1				
70								
71								
72								
73			(1)					
74								
75								し
76								
77	(2)	1	(1)			(1)		解
78	(2)				(3)	(1)		S・ア
79					1			し
80	(1)							
81			(1)		(1)			ア・接
82	1	(5)	1		(1)			S・ア
83				1				ア
84	1							解
85								S
86								し
87	(6)		(1)(1)	2	(3)	(1)		解
88		1			1			
89								
90								
91								
92								
93								
94	1							「」・解・ア
95					(1)			
96	1	(1)		1		(1)		S
97								
98								
99								
100								

用いられた「この在五中将」なのであるが、かような表現が出来るのも、既に存在していた第一次・第二次の物語を前提にし、それに依拠しているからこそである。

と締め括っている。「既に存在していた第一次・第二次の物語を前提にし、それに依拠している」場合にコ系が用いられる、ということだろうか。

ならば、第三次の成立と推定する章段に登場する「男」に対しては、かなりの頻度でコ系が用いられていてもよさそうなものだ。しかし、そうなってはいない。【表3】を見ると、第三次の成立とする章段のなかで気になるのはせいぜい23・58・63・65段くらいで、それ以外の章段に同じ傾向が見られるわけではない。片桐は58・63・65段という都合のいい章段ばかりをとりあげているが、他の章段はどう説明するのだろう。

58・63・65段のみに対象を限定したとしても、その内部に矛盾が認められる。58段の対人物コ系四例中一例は長岡の「女ども」、63段の三例中一例は九十九髪の「女」、65段の九例中一例は「帝」で四例は「女」だ。65段の四例の「女」は主要人物の高子と読めるから除くとしても、58・63・65段の計一六例のうち三例は、第一・二次成立とされる章段に登場していない人物だ。彼らが馴染みの人物であるはずはない。彼らにコ系が付くことをどう説明するのだろう。

そして、問題の63段「コノ在五中将」についても、コノが付く理由は他に考えられる。次節ⅱで詳述するが、お馴染みだからコノを付けたわけでは決してないのだ。

なお、片桐は係助詞ナムの用法についても論及しているので、それも検討しておこう。

片桐は、伊勢物語のナム文を次のように二分した。

A…語り手がサービス的に顔を出す草子地的発言
　行動の理由や場面の状況などを、付加的、補足的、挿入句的にコメントする、語り手の立場からの表現
B…登場人物の行動を直接的に述べてストーリーの展開をはかるもの

片桐によれば、第一・二次の成立と推定する章段にはA型のナム文が、第三次の成立と推定する章段にはB型のナム文が認められるという。A型→B型の変化もまた、ソ系多用→コ系多用の変化と同じく、「〈物語から小説へ〉という変化」の一例と説いている。

【表3】では、ナム文をA／B型に二分しきれないと考えたため七分したが、片桐の二分法に従うなら、Aグループには「解」のほか「し」・「接」（漢字・ひらがな）が、Bグループには「S」のほか「マ」・「ア」（英文字・カタカナ）が属すことになる。もし片桐の言うとおりなら、第一・二次の成立とされる章段（網掛アリ）にはAグループの「解」・「し」・「接」が、第三次の成立とされる章段（網掛ナシ）にはBグループの「S」・「マ」・「ア」が集中するはずだ。しかし、第一・二次の成立とされる章段にもBグループの「S」・「マ」・

「ア」はあるし、第三次の成立とされる章段にもAグループの「し」はある。これをどう説明するのか。指示語のところでも批判したが、ナムの場合もA…1・9・10・84段／B…21・63段と数例しかとりあげておらず、全体を見ていない。また、63段最末尾にある「思ふをも、思はぬをも、けけぢめ見せぬ心ナムありける」という明らかな「サービス的コメント」（【表3】では「し」）を、「後略」としてとりあげていない（詳細は片桐論文と【表3】を対照されたい）。さらに言うと、1・10段のナム文の分類にも従えないところがある。片桐のナム論は、進化論的変化に結び付ける／付けない以前に、サンプルの採集・処理といった基礎的部分に欠陥がある。ソ／コ系の場合同様、ナムに関する片桐の説に対しても従うことはできない。

以上で成立論派に対する回答を終える。ソ／コ系に関して言えば、作者あるいは文体の相違と結論づけて考察を終えたり、安易な進化論に走ったりしてはならない。文脈に即し、ソ／コ系の性格をより明確しながら、ソ／コ系が使われるべき文体とはどのようなものかといったところまで考察する必要がある。

四　ソ／コ系の〈非転換／転換〉機能に関する補足・補強

ここからは、ソ／コ系の〈非転換／転換〉機能に関する補足・補強を行なう。補足とは、対人物／地の文を対象とした前稿より範囲を広げ、対事物／会話文・心話文にも目を向けることを意味し、補強とは、ソ／コ系の〈非転換／転換〉の様相をより細かに考究することを意味する。

i ソ系多用による文連接

まずは、ソ系の〈非転換〉機能から。

ソ系の性格について、前節では、

聞き手の意識をその場にとどめ、積極的な展開を阻むような役割がある、とも言える。

とまとめた。「聞き手の意識をその場にとどめ」ることが〈非転換〉なのだが、この原理を用いて説明したい現象がある。

伊勢物語を見ていくと、前文あるいは前々文の情報をソ系で受け、新たな情報を追加して、それを何度か繰り返す、という用例が目につく。【表4】には、二箇所以上のソ系連続使用が見られる用例を抜き出した（対事物も含む）。2段で説明するなら、西の京に「女」がいるという情報をまず提示し、その「女」についての新たな情報を「ソノ女」・「ソノ人」・「ソレ」以下に追加する。82段で説明するなら、まず「宮」の存在を示し、次にその「宮」と登場人物との関係を示す。つづいて、前文の特定の語句と繋ぐわけではないが、「ソノ時」で前文と繋がりをもたせ、前文で言い切れなかった情報を追加する。再び「人」－「人」の提示－追加を行ない、ややあって、「桜」－「木」の提示－追加を繰り返す。提示－追加を一々繰り返さ

なければ、

年ごとのさくらの花ざかりには、山崎のあなた、水無瀬といふ所の宮へ、右の馬頭なりける人を常に率ておはしましけり…

というような形にもなっただろうが、一文を簡潔に短く切っていくため、〈提示追加型文体〉とでも呼ぶべき文体になったのだろう。

ちなみに、〈提示追加型文体〉に用いられる指示語は圧倒的にソ系だ。コ系連続使用の〈提示追加型文体〉は、ない。コ系の前後は、前文あるいは前々文の情報を一々踏まえながら少しずつ焦点をズラしていく〈提示追加型文体〉ではなく、もっと積極的に展開していく文体になっている。〈提示追加型文体〉

【表4】 前文・前々文の情報をソ系で受けて新たな情報を追加していく用例（二箇所以上集中する用例）

2段	9段
西の京に女ありけり。 ソノ女、世人にはまされりけり。 ソノ人、かたちよりは心なむまさりたりける。 ひとりのみもあらざりけらし。 ソレを、カノまめ男〜	三河の国、八橋といふ所にいたりぬ。 ソコを八橋といひけるは、水ゆく河の蜘蛛手なれば、橋を八つわたせるによりてなむ八橋といひける。 ソの沢のほとりの木のかげに下りゐて、かれいひ食ひけり。 ソの沢にかきつばたおもしろく咲きたり。 ソレを見て、ある人のいはく〜

9段	39段	77段
いと大きなる河あり。 ソレを角田河といふ。 ソノ河のほとりにむれゐて思ひやれば〜	西院の帝と申す帝おはしましけり。 ソノ帝のみこ、崇子と申すいまそかりけり。 ソノみこうせ給ひて〜	昔、田邑の帝と申す帝おはしましけり。 ソノ時の女御、多賀幾子と申すみまそかりけり。 ソレうせ給ひて〜

82段

山崎のあなたに、水無瀬といふ所に宮ありけり。

年ごとのさくらの花ざかりには、ソノ宮へなむおはしましける。

ソノ時、石の馬頭なりける人を、常に率ておはしましけり。

時世へて久しくなりにければ、ソノ人の名忘れにけり。

狩はねむごろにもせで、酒をのみ飲みつつ、やまと歌にかかれりけり。

いま狩する交野の渚の家、ソノ院の桜ことにおもしろし。

ソノ木の下におりゐて〜

87段

さる滝の上に、わらうだの大きさして、さし出でたる石あり。

ソノ石のうへに走りかかる水は、小柑子、栗の大きさにてこぼれ落つ。

ソコなる人にみな滝の歌よます。

87段

〜とよみて、家にかへり来ぬ。

ソノ夜、南の風吹きて、浪いと高し。

つとめて、ソノ家の女の子ども出でて、浮海松の浪に寄せられたる拾ひて、家の内に持て来ぬ。

女がたより、ソノ海松を高坏にもりて〜

101段

昔、左兵衛督なりける在原の行平といふありけり。

ソノ人の家によき酒ありと聞きて、うへにありける左中弁藤原の良近といふをなむ、まらうどざねにて、ソノ日はあるじまうけしたりける。

情ある人にて、瓶に花をさせり。

ソノ花の中に、あやしき藤の花ありけり。

花のしなひ、三尺六寸ばかりなむありける。

ソレを題にてよむ。

||(二重線)…前文で提示された語句(囲み)についてさらに解説する

|(実線)…前文・前々文で提示された語句(囲み)を受けて展開する

:(点線)…前文の時間・場所を受けて展開する

はソ系多用文の特徴と言える。

では、この〈提示追加型文体〉にソ系が用いられる理由を、〈非転換〉という概念で説明しよう。前々節でまとめたとおり、「ただ単に提示されているだけの状態」の後にくるべき指示語はソ系だ。〈提示追加型文体〉も情報を小出しに提示して追加を繰り返すから、提示から追加までで焦点が重なっている間は、〈非転換〉のまま「聞き手の意識をその場にとどめ」るソ系が適している。すっかり意識を〈転換〉してしまうコ系は適さない。〈提示追加型文体〉には、ソ系が用いられるべき必然性がある。

ソ系は、焦点となる人物を〈転換〉しないだけではない。対事物も含めた〈提示追加型文体〉において、ソ系は意識を繋ぐ接着剤のような役割を果している。このソ系多用による文連接の現象は、ソ系〈非転換〉説を補強するものと言えるだろう。

ii 会話文・心話文におけるコ系多用、あるいは、現場不在対象に付くコ系

つづいて、コ系の〈転換〉機能を考える。〈転換〉機能とは、前稿でまとめた、

それまでの聞き手の意識を一旦切り、新たな展開へと導くような役割

というものだが、右のままでは、物語空間の対象Aから対象Bに焦点が〈転換〉するだけの印象を受ける。もちろん、結果として、焦点は対象Aから対象Bに〈転換〉している。が、より詳しく言うと、〈転換〉する際には、新たな対象に注目させるために物語空間の対象＝Bを一旦語り空間まで引き込み、語り手の近くにBをもってくることで特立している。〈転換〉に近称のコ系を用いるのはそういう背景があるのだが、要するに、〈転換〉とは、対象A↓対象Bだけでなく、物語空間↓語り空間の〈転換〉をも意味しているのだ。対象間の〈転換〉を横軸の〈転換〉とすれば、空間間の〈転換〉は、縦軸の〈転換〉と言える。具体的な説明に入る前に、空間間の縦軸の〈転換〉、ということをおさえておきたい（従来言われているコ系の引き込み機能と差はないが、原理的統一を図り、「縦軸の〈転換〉」と言い換えておく）。

さて、第一にとりあげるのは、会話文・心話文においてなぜコ系が多用されるか、あるいは、なぜ現場不在対象にコ系が付か、といった問題だ。

原則として、会話文＝「〜」・心話文＝『〜』の〈直接話法〉においてソ系／コ系どちらを用いるかは、会話・心話を発する登場人物＝話者と、話者が指示する対象の、物語空間における遠近によって決まるはずだ。会話文・心話文の場合は、話者・対象とも同じ物語空間にあるから、空間間の問題は基本的に考えなくてもいいことになる。一方、地の文の〈間接話法〉では、語り手は語り空間に、対象は物語空間にあるから、たとえ物語

空間において主人公から遠く離れた対象であっても、それを語り空間に引き込んで特立する際には、語り手に近いということで近称のコ系を用いることも起こり得る。物語空間と語り空間の両方に目配りしなければならないのが地の文の指示だが、それに比べると、会話文・心話文の指示は、理論上は物語空間における遠近だけで論じられることになる。

しかし、そう簡単ではない。周知のように、当時の文章表現では〈直接話法〉と〈間接話法〉のちがいが現在のように厳密ではない。たとえば、源氏物語桐壺巻で、桐壺帝の使者として亡くなった桐壺更衣の母君を弔問する靫負の命婦は、帝の言葉を伝える際、

わが御心ながら、あながちに人目おどろくばかりおぼされしも…

と語る。この場合、帝が「御」とか「おぼす」とかの自敬表現を用いたとは考えられない。これは、本来は〈直接話法〉で話すべきところに、帝を尊敬する命婦の意識が介入し、一部〈間接話法〉のようになってしまった表現だ。このような〈準直接話法〉とも呼ぶべき会話文・心話文があるから、単純に考えられない。〈準直接話法〉になると、物語空間における遠近だけでなく、語り空間にいる語り手の意識の介入にも注意しなければならなくなるのだ。

【表5】には、伊勢物語の会話文・心話文で指示語を含んでいる全用例をあげた。ソ／コ／カ系全てを対象としたが（伊勢物語にア系はない）、カ系が二例あるだけで、あとはみなコ系だ。もちろん、物語空間における遠近の関係上どうしてもコ系を用いなければならない用例はある。しかし、別にコ系を付けなくてもいい用例もある。そういう用例に関しては、語り手が意識的にコ系を付けたと考える余地があるのではないか。あるいは、コ系が付かないはずの用例もある。【表5】で反転してある対象は、話者がいる現場には存在しないことが明らかな対象だ。遠隔の現場不在対象を近称のコ系で指示することは、〈直接話法〉ではあり得ない。〈直接話法〉では、語り手が純粋に話者になりきり、物語空間において話者から近い対象に対してのみコ系を用いるはずだから、〈直接話法〉で考えているかぎり、現場不在対象に付くコ系は説明できない。とすれば、コ系を使いたいという語り手としての意識が介入する〈準直接話法〉で考えるしかあるまい。

以下、語り手の意識がどう介入しているかをまとめてみる。

①会話文・心話文を語る語り手は、登場人物＝話者に同化している。

←

②ただし、完全には話者に同化しきれず、語り手としての性格を抑制できない。

←

③その結果、話者にとっての対象さえもコ系で指示し、語り空間に引き込む。

【表5】　会話文・心話文におけるコ系多用＆現場不在対象に付くコ系

番号	章段	ソ／コ／カ系指示語を含む話し言葉・心話
(1)	6	「カレは何ぞ」となむ男に問ひける
(2)	9	「コレなむ都鳥」といふを聞きて
(3)	12	「コノ野は盗人あなり」とて、火つけむとす
(4)	24	「コノ戸あけ給へ」とたたきけれど
(5)	39	「コノ蛍のともす火にや見ゆらむ～」とて、乗れる男のよめる
(6)	61	「コレは色好むといふすきもの」と簾の内なる人のいひけるを聞きて
(7)	62	「コノありつる人たまへ」とあるじにいひければ
(8)	63	『こと人はいと情なし。いかでコノ在五中将に逢はせてしがな』と思ふ心あり
(9)	65	「～コノ男にほだされて」とてなむ泣きける
(10)	69	「常の使よりは、コノ人よくいたはれ」といひやりければ
(11)	78	「～今宵はココにさぶらはむ」と申し給ふ
(12)		「～コノ石を奉らむ」とのたまひて
(13)		「コレをただに奉らばすずろなるべし」とて、人々に歌よませ給ふ
(14)	87	「いざ、コノ山の上にありといふ布引の滝見にのぼらむ」といひて
(15)	96	「カシコより人おこせば、コレをやれ」とて、去ぬ
(16)	107	「～身さいはひあらば、コノ雨は降らじ」といへりければ

※カ系は二例のみ（四例）。ソ系はナシ。
※反復は、話者がいる現場には存在しないはずの遠くの人・物。直接話法では説明不可能。

←④語り空間には、話者（語り手が同化）と、話者にとっての対象（語り手が引き込み）がともに存在する。語り手が両者を語り空間にそろえた。

会話文・心話文においてコ系が多用される、あるいは、現場不在対象にコ系が付く理由は、右のように考えられる。③の「語り空間に引き込む」ということが、すなわち、空間間の縦軸の〈転換〉だ。そして、④に示したように、この背景には、話者を語り空間に降ろしてきたのだから、話者にとっての対象も語り空間まで引き込みたい、という語り手の意図がはたらいていると考えられる。

会話文・心話文の指示は地の文の指示と事情が異なるため、前稿ではとりあげなかった。〈準直接話法〉であってもやはり会話文・心話文にはちがいないから、対象間の横軸の〈転換〉については論及できないが、前稿で触れなかった会話文・心話文にも空間間の縦軸の〈転換〉機能が認められることを補足できたと思う。

なお、前節で紹介したように、片桐は、63段の「コノ在五中将」について、「既に存在していた第一次・第二次の物語を前提にし、それに依拠し

ている」からコ系を用いたと説いている。しかし、「在五中将」という現場不在対象にコ系を付けた理由は、右のように考えられるのだ。

iii　後注冒頭部にくるコ系

空間間の縦軸の〈転換〉に関して、もう一点。後注冒頭部にくるコ系について論じてみたい。

物語空間の出来事を語った語り手は、物語を語り終えた後、時として、語り空間に腰を据えて種明かしや批評を行なう。後注だ。その後注の冒頭部にコ系がくることがある。コ系以外の指示語がくることはないから、これはコ系の特徴と呼べるだろう。【表6】に全用例をあげた。

なぜコ系なのか。後注冒頭部は、まさに、「それまでの聞き手の意識を一旦切り、新たな展開へと導く」ところ、意識の〈転換〉が行なわれるところだ。「物語は終わった。ここからは注だ」と気持ちを切り換え、物語空間＝「昔」から語り空間＝「今」へと一旦意識を移すところだ。語り手は語り部として物語空間を再現し、聞き手も物語空間に意識を向けていた。が、物語が終わると、語り手はコメンテーターへと変貌し、物語空間の再現に気を遣わず、語り空間に腰を据えてコメントする。物語空間を指向していた聞き手も、語り空間に戻ってきたことを意識する。これは、物語空間から語り空間へ、という空間間の縦軸の〈転換〉だ。

ちなみに、6段の後注では、冒頭部にはコレがくるものの、しばらくするとソレが用いられる。頭を切り換える、すなわち、〈転換〉する必要のある後注冒頭部にはコレを用い、慣れてきてからは特に気負う必要もないため、客観的に指示するソレを用いたのではなかろうか。

コ系の〈転換〉は、人や物などの有形の対象についてのみ当てはまるわけではない。後注冒頭部のように、全体的に大きく意識が〈転換〉する場合もあるのだ。

【表6】　後注におけるコ系の用例

番号	章段	コ系指示語を含む後注
(1)	6	コレは、二条の后の、いとこの女御の御もとに仕うまつるやうにてゐ給へりけるを、かたちのいとめでたくおはしければ、盗みて負ひて出でたりけるを、御兄堀河の大臣、太郎国経の大納言まだ下臈にて内へまゐり給ふに、いみじう泣く人あるを聞きつけて、とどめてとりかへし給うてけり。ソレをかく鬼とはいふなりけり。まだいと若うて后のただにおはしける時とや。
(2)	44	コノ歌は、あるが中におもしろければ、心とどめてよまず、腹に味はひて。
(3)	63	世の中の例として、思ふをば思ひ、思はぬをば思はぬものを、コノ人は、思ふをも、思はぬをも、けぢめ見せぬ心なむありける。
(4)	79	コレは貞数の親王。時の人、中将の子となむいひける。兄の中納言行平の娘の腹なり。
(5)	104	コレは、斎宮の物見給ひける車に、かく聞こえたりければ、見さしてかへり給ひにけりとなむ。

前稿で対象外とした用例をとりあげ、ソ／コ系の〈非転換／転換〉機能の適応範囲を拡大＝補足し、併せて機能自体の確認＝補強も行なってきた。

なお、最後に、なぜ同一章段内においてソ／コ系の併存が少なく、なぜ一方が多ければ一方が少ないのか、という問題にもごく簡単に答えておこう。iで述べたように、ソ系を用いるのは提示追加型文体においてだ。文を短く切り、情報を小出しにし、そこに出てきた語句や時・所を〈非転換〉のソ系で繋いでおいて、新たな情報へと焦点をズラす。こういう提示追加型文体を用いる語り手は、ゆっくりと冷静に文を繋いでいくタイプだろう。一方、コ系を用いて登場人物を特立したがる語り手は、対照的に熱いタイプと言える。登場人物は動的で、焦点は右から左、左から右と一気に振られる。しかも、前節で述べたように、コ系多用型文体は語りの場から近いから、語り手の体温が残っていても不思議ではない。ソ系は冷めた語り手が好み、コ系は熱い語り手が好む。その対照性が、ソ／コ系の反比例的分布となってあらわれているのではないだろうか。

五　結び

序でも述べたとおり、前稿には書き損じや書き残しがあり、削除・訂正・付加したい事柄がかなりあった。

主な書き損じをまとめると、次のようになる。ソ／コ系の〈非転換／転換〉を説くところで例外を多く設けた。加えて、例外を多く設けた大和物語・平中物語の用例までもち出した。ちなみに、例外数が変化すれば、ソ／コ系の分布を示した前稿〈表5〉の数値も変わり、そこから導き出される結論にも変化が生じる。前稿〈表5〉およびそこから導き出された結論にも、書き損じがある。これらに関しては、表を訂正したり、あるいは、削除という方法を採った。

主な書き残しは、成立論派の進化論的見解を批判しなかったこと、対事物や会話文・心話文をとりあげなかったこと、ソ／コ系の反比例的関係について論及しなかったこと、などだ。これらに関しては、本稿第三・四節で回答した。また、〈非転換／転換〉に関しても、前稿では、焦点となる対象間の〈非転換／転換〉ばかりが前面に出ていたように思うが、今回、〈非転換〉に関しては意識を繋ぐはたらきを、〈転換〉に関しては空間間の〈転換〉を論じることができたと思う。

まだ満足できるレベルには至ってないが、前稿をフォローするものとして読んでもらえるなら幸いである。

注

(1)「伊勢物語の三元的成立の論」（「文学」昭36・10）。
(2)『伊勢物語の新研究』昭62・9明治書院84～102頁。
(3)「物語文章史と指示語」（大阪大学「語文」昭56・12）。

(4)「伊勢物語の指示表現」（大阪教育大学「国語表現研究」昭61・12）。
(5)具体的な分類は『鑑賞日本古典文学　伊勢物語・大和物語』昭50・11角川書店15～16頁に明示される。
(6)三谷榮一編『体系　物語文学史　第一巻』昭57・9有精堂347頁に明言される。
(7)「歌物語はなぜ一時期の所産でしかなかったのか」（「国文学」昭59・11）。
(8)「歌物語の文章―『なむ』の係り結びをめぐって―」（「国語国文」昭28・6）。
(9)「大和物語の文章―『この』の表現性を中心として―」（「城南国文」昭60・12）。
(10)「『大和物語』の文章―いわゆる前半部・後半部の差異をめぐって―」（「鹿児島女子短期大学紀要」昭62・2）。
(11)『新潮日本古典集成　伊勢物語』の附録に一覧表があり、至便。

（たぐち　ひさゆき）